

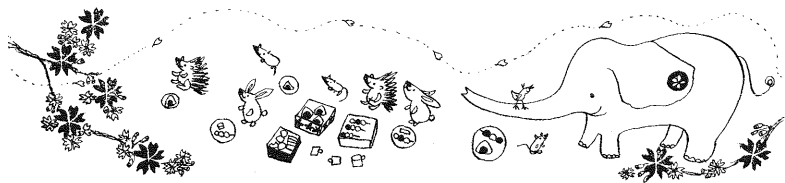
卷頭言

百三十二年目の春

永原 惠三

梅がほのかな香りをともなつて咲き、桜が絢爛豪華に咲き乱れて、春が始まり、花々は緑の少ないモノトーンの風景に彩りを与えます。ひとびとは桜の木々のもとに集い、花をめでつつ、春のよろこびを分かち合います。

日本の幼稚園は、今年で百三十二年目の春を迎えます。その歩みは、現在のお茶の水女子大学附属幼稚園がたどつた道のもあります。新しい明治政府のもとで、欧米の近代化に追いつくべく、国をあげてその政治や経済そして教育制度などが集中的に研究され、日本に導入されました。当時の日本政府が官立というやり方で、まず女子師範学校そして幼稚園を開設したことは、画期的なことであり、以来、附属幼稚園がほとんど絶えることなく百三十二年の歴史を継続したこ



とは、大変意義深く、現在の私たちにとっての大きな支えとなっている、といえるでしょう。

さて、春が来て桜の咲く時期になると、卒業と入学という人生の節目を、多くのひとびとが迎えます。それは子どもたちだけではなく、親、兄弟姉妹、親戚、友人など、子どもたちを取り巻くさまざまなひとびとにとっての大きな節目です。年月を経た大きな桜の木々のもとで集うひとびとの姿は、新年とはまた違って、新たな出会いの華やかさと、他方で、別れによるしみじみとした情感とが混じり合っています。それはまるで、桜の木々が場面を演出しているようなハレの舞台になっています。

正月は個々人にとって、あるいは家族にとっての、新しい年に向けた祈願をする時であるのに対して、桜が演出する春の世界では、新しい共同体への参加や離別が、大きな主題となっていると思われる。そこにはもちろん家族という共同体も含まれますが、重要なのは、ひとりの個人が家族から離れて、より大きな社会的共同体の中で、集団の生活にかかわるということです。そのためのおいばけ儀礼が桜の木をめぐる執り行われるといえましょう。人生の節目に立つ個々人が、今、新たな共同体での生活に参入するにあたって、送り出す側と新たに迎え入れる側との間で、そうした儀礼の場が生成する、と考えられます。



幼稚園の新学期は、子どもたちが家庭から離れて、他の知らない子どもたちと一緒に過ごし始める時であり、保護者としても新たな集団へと導き入れられる時です。教員は、子どもたちがそれぞれの尺度でもって他者とかかわってゆくプロセスをしっかりと見ながら、子どもたち個々人が主体的に他者と共にさまざまなつながりを形成するのを後ろからしっかりと支えています。ここで考えられる集団とは、決して上から与えられたものではなく、むしろ、子どもたちが自らのやり方でつくり出す集団であり、それがどれほど稚拙であっても、自分自身で他者とのつながりを見いだせるプロセスがそこにある、という大前提、あるいは子どもへの信頼があると思われれます。子どもたちのうちに自ずと、そうした他者とのかわりが形成されることこそ、重要なことではないかと考えます。

園内で遊ぶ子どもたちを見ていますと、皆一人ひとりがさまざまな可能性をもった人間存在、つまり「ひとびと」という社会的存在であることを強く感じます。そのようなあり方は、別の言葉でいえば、「ひとびとの原風景」であるように思います。つまり、そうした存在の仕方は、私たち人間が存在するにあたって、すでに与えられている姿そのものであり、私たち人間の基本の姿はそこにあると思われるのです。このことは、人間が物をも含めた他者への配慮や関心をもち、それによって、ひとと共にありながら協働し、その結果として何らかの共同



体を形成する、という人間存在の土壌を明らかにしている、と考えます。そうした人間の土壌が豊かに耕され、養分を吸収できるために、幼稚園という場があると思われまます。

子どもたちはドングリの実やモミジの葉などを拾ってきて大切にします。何気ない日常の中に、大人が見落としている、あるいは見なくなった、自然界の「美」についても豊かに取り込む力、そしてその「美」を他者と分かち合うことを、子どもたちはそれぞれにもっているように思います。私たちは、自分自身がどこかに置いてきてしまった美的感覚を、子どもたちによって呼び覚まされ、「ひとびとの原風景」に接することで、いわば「原」美的感覚を喚起されるのかもしれない。こうした「ひとびとの原風景」は百三十二年目の春を迎えても、表面的には変化することはあるでしょうが、変わらずに豊かな基盤として、存在し続けるように思われます。

年輪を経た桜の木々のまわりには、「原風景」への旅立ちをする子どもたちの姿があります。幼稚園という小さな共同体の花が、その風景の中で見事に開花することを、確かな期待と少しの不安を携えながら願いつつ、私たちは桜の木々のもとに集うのかもしれない。百三十二年目の春も変わらず、桜の木々は生長し、子どもたちの門出を祝っていることでしょう。

(お茶の水女子大学)